

古チベット語史料からみた10世紀前半の青海東部地域

岩尾 一史

Tibet and the Eastern Qinghai in 10th century as seen in Old Tibetan document

IWAO Kazushi

Abstract : The gateway to the Tibetan plateau, the eastern Amdo area—more precisely, the northern and southern foothills of Laji Shan 拉脊山—was ruled by the Old Tibetan Empire until the middle of the ninth century. Chinese sources testify to the existence of various “Tibetan” groups, called Tufan 吐蕃 or Xifan 西蕃, in the eastern Amdo area, which came together to form the Qingtang kingdom 青唐王国 in the middle of the eleventh century. Although numerous studies on the Qing Tang kingdom have explored the eleventh-century history of this area, there are relatively few studies of the area during the tenth century; consequently, the full history of the eastern Amdo area remains to be elucidated. To fill this gap, this paper marshals new historical data on the area from the tenth century.

The main historical data of this paper is from Pelliot tibétain 1082, a Dunhuang Tibetan document, an official letter sent from the Uighur khagan in Ganzhou to the ruler of Guiyijun 歸義軍 regime in Dunhuang, in the first half of tenth century. The analysis of Pelliot tibétain 1082 leads to note being taken of the following three points (1) In the first part of the letter, Uighur khagan reports on the state of the local powers in the eastern Amdo area. (2) The local powers that Uigur khagan mentions in the latter are relevant to the strategically important areas to the Old Tibetan Empire of the period, including the military government of *Rma* (*Rma grom*) and of *Dbyar mo thang*. (3) These military governments also functioned as the military foundation of Blon khong bzher 論恐熱 and Zhang bibi 尚婢婢, which had engaged in conflict with each other after the collapse of the Empire in the middle of the ninth century.

關鍵詞 : 吐蕃, 青海, 敦煌文書, PT1082, 甘州回鶻

Keywords : Old Tibetan Empire, Amdo, Dunhuang documents, Pelliot tibétain 1082, Ganzhou Uighurs

1 はじめに

842年、ツェンポのダルマ暗殺に伴い古代チベット帝国（吐蕃）は崩壊した。チベットの支配下にいた各集団はそれぞれ自立を目指し、その結果として河西地域～青海地域には様々な集団が群雄割拠することとなった。漢文史料によると「吐蕃」「西蕃」と呼ばれる集団がおり、10世紀頃から河西地域の特に涼州周辺に散居するようになったらしいこと、そして青海地域各地にも「吐蕃」の集団が居していたことが判明しており、そして彼らの中から11世紀前半に拉脊山西北辺のツォンカにて青唐王国を建国する人々が出てきたのである。青唐王国成立前後の事情については、主に漢文史料に依って多くの先行研究が積み上げられ、かなりの程度 of ことが判明している¹。しかし一方で9世紀後半のチベット帝国崩壊後から青唐王国誕生までの150年間、青海東部地域がどのような状況にあったかということは、実はあまりわかっていない。そこで本稿では当該時代の史実を解明するための第一歩として、敦煌発現古チベット語史料 *Pelliot tibétain*（以下、*P.t.* と略）1082を手掛かりに、当時の状況を確認したい。

2 *Pelliot tibétain* 1082と青海

古チベット語文書 *P.t.* 1082は甘州ウイグルから敦煌の漢人政権である帰義軍政権へ送られたチベット語の外交文書である。この文書は、当該時期における甘州ウイグル可汗と敦煌の帰義軍政権との関係、国際共通語としてのチベット語のありかたなど、検討に値する興味深い情報を多く内包しており、それゆえに先行研究によって紹介されてきた²。そのような先行研究があるにもかかわらず本稿にてこの文書を再度取り上げるのは、先述の通りいまだ詳細が明らかではない10世紀前半における青海省東部の状況の一端が、10世紀前半に作成された本文書によって判明するからである。なお文書の年代については、森安

¹ 河西チベット族や青唐王国の歴史については岩崎力や鈴木俊一の一連の研究（岩崎 1974、1975、1977、1987、Iwasaki 1986、1993、鈴木 1982、1984、1985、1986、1988）や榎 1994 [1940]、Horlemann 2004、劉 2004、祝 2010、斉 2011、森本 2015および、これらの研究における参考文献を参照されたい。

² *P.t.* 1082はまずチベット帝国期以降の河西地域におけるチベット語使用の状況の証拠として Uray 1981 : 88 にとりあげられた。チベット帝国期以降のチベット語使用に関しては武内 2002、Takeuchi 2004を参照されたい。

(2000) ならびに石川 (2003a) に依拠している³。

本文書は表に41行のチベット文と漢文の朱印1顆⁴、裏に1行の漢文⁵があるが、紙幅の都合上、また本稿の問題関心上、本稿で扱うのは表の冒頭部分1-12行目のみである。

以下に翻字テキストと試訳、そして簡単な注釈を載せる。本文書には王・陳 (1983: 50-52)、高 (1995: 329-335)、石川 (2003) による全訳が、山口 (1985: 516-517) の部分訳があり、いくつかの箇所では筆者と解釈を異にするが、明らかな誤訳などを除き重大な相違点についてのみ注釈にて言及することとし、より詳細な検討は別稿にて行いたい。翻字は OTDO (Old Tibetan Documents Online) と同じ方式を用いる⁶。翻字および試訳において使用するその他の記号は以下の通りである。

【 】 筆者による補遺

() 元のチベット語テキスト及び簡単な注釈

(数字) 行数

[翻字]

- (1) \$ /:/ deng re hve pur kha gan gl bka' //
- (2) dbyar gl tshad pa la / 'bangs mang po ches la // 'o brgyal thugs bde 'am my[i b---]
- (3) \$ // spyang ngar phrin ylg zhu zhIn gsol pa gdas // phrin ylg nang nas nong zho ma
- (4) mchIs zhes thos // glo ba dga' /
- (5) \$ // spyang nga nas yang bka' stsal na / chab srId gl bka' mchId cl yang myi gda' //
- (6) bdag gl pho nya yang leng cu 'og mar mchis // slar yang mchIs / rgya rje [---]
- (7) la phebs shag shlg ma mchIs // keng shI 'I bka' mchI[d] m[-I---]
- (8) yar mchIs pa la re lta des gsol // dbyar mo thang [tshun chad gl] 'od 'b[a]r [la] [---]
- (9) ba ma mchIs // gog chu rma grom gl pho nya spyang ngar mchIs // rma grom khrI

³ 森安 (2000: 84-85) が文書の年代を932~934年とみるのに対して、石川 (2003a: 29) は年代を「934年の夏」としている。いずれにせよ、この文書が送られたのは10世紀前半ということになる。

⁴ 朱印については森安 2000: 81, 85-87を参照されたい。

⁵ 漢文に関しては、Soymié *et al.* 1991: 19 (Pelliot chinois 3529項) を参照されたい。

⁶ Old Tibetan Documents Online (<http://otdo.aa-ken.jp>) あるいは Imaeda *et al.* 2007: xxxi-xxxiii を参照されたい。

sde cI g zha

- (10) du blta zhes gsol // bod gI pho nya jag rong du yang mchIs // dbyar mo thang
gIIng du
- (11) yang mchIs pa las // 'od 'bar tang nI ma dum // khyed gI pho nya yang gsol par
- (12) mchI // gzhan nI bka' mchId cI yang myI gda' //
- (13) \$ // bod gI g.yar tshIgs las // ston sla ra ba ngo la dmag drang zhes m[ch?]I[d?]
[---]
- (14) sho nI cha ma mchIs // da dun nI dmag 'gul ba [ma? m?]chi[s?] [---]
- (15) rIm 'gro cher la 'tshol // stong gI dus la bab // leng kong sa nas ya[ng?] [---]
- (16) ba ma mchIs na // rIm 'gro cher mdzad //
- (後略)

[試訳]

- (1) テングリ・ウイグル可汗の言葉
- (2) 夏の暑さのなか、多くの民を統治してご苦労である。お元気か。
- (3) 【可汗の】御前に手紙を送ってきて、【その】手紙において、禍事はない、
(4) と聞いた。うれしく思う。
- (5) 【可汗の】御前からまた言葉を与えるが、政治 (chab srId) の話は何もない。
- (6) 私の使者が涼州とその向こうまで ('og mar) 行き、戻ってきた。中国の主
【のもと】…。(7) …にいらっしゃったが、ギクシャクすることはなかつ
た。京師 (keng shi = 長安) からのご命令… (8) 戻ってきて、その様々
なことについて (re lta des) 報告した。
ヤルモタンまでの嘸末は…。… (9) はない。
廓州の黄河トムの使者が当方のもとに来て、「黄河トムの一万戸は【ウイ
グル可汗に】拝謁 (10) するつもりだ」と申し上げた。
チベットの使者がジャクロンにまで行き、ヤルモタンの地域にも (11)
行ったが、嘸末とは和睦しなかった。
・汝の使者も報告に (12) 来るべきである。
他に話は何もない。
- (13) チベットの俚諺 (? g.yar tshigs) に、「孟秋の時期に進軍する」という言葉
が…。
- (14) サイコロ占いでは定かではない。今現在、軍隊の徴集はない。(15) 厄払
いを盛大にきなさい。秋になって、令公のところからも… (16) …が来な

ければ、厄払いを盛大にされよ。

[注釈]

- (1) **deng re hve pur kha gan** 「テングリ・ウイグル可汗」：Uray (1980 : 82) がはじめに指摘し、そして森安 (2000 : 84) が確認した通り、この語が甘州ウイグル可汗を指すことは間違いない。問題はこれが具体的に誰を指すかということであるが、石川 (2003a : 29) は本文書が934年夏に成立したという前提のもとに奉化可汗にあてている。
- (2) **chis** 「統治する」：石川 (2003a : 32, n.8) は動詞 **mchi** の過去形 **mchis** とみて「参じた」と訳すが、すでに Imaeda 1980 や Richardson (1998 [1969]) が明らかにした通り、この **chis** は「統治する」(Tib. **chis** / **tshis** < Chin. 治) の意である。
- (3) **spya nga** 「【可汗の】御前」：**spya nga** は **spyan nga** 「御目の前、御前」の意で (高 1995 : 333)、手紙文書中では **zha nga** / **zhal nga** 「御顔前」と同義で使われる。石川 (2003a : 26) は御前を手紙の受取手と解釈して3行目にて「御前から御言葉を賜った時」と訳す。あるいは **spya** (**spyan**) が **mig** 「眼」の敬語形であるからそのように解釈したのかもしれない。しかし当該箇所の **spya nga** には位置格の **r** 「～のところに」がついているから、「～から」と訳するのには無理がある。実際のところ、「ツェンポの御前から命令を与える」(Pt.1287, l. 255: **btsan po zha snga nas // bka' stsald pa' //**) という例にて代表されるように、送り手自身が受け取り手よりも明らかに高位の場合、自身に敬語形をつけるのは当時の慣例としておかしくない。そうすると、この御前は送り手であるウイグル可汗と解釈すべきであろう。なお5行目にも「御前」が使われ、山口 (1985) は「そちらの御前よりまた御便りを頂いた所」と訳すが、此处は明らかに手紙の書式に則っており (武内 1986)、御前はやはり差出人のウイグル可汗でなければならない。
- (6) **leng cu** 「涼州」：石川 (2003a : 32, n.11) は山口 (1985 : 516) を引用して涼 (靈?) 州とした上で、涼州の方がより可能性が高い、と考える。しかし Uray (1990) が **leng cu** = 涼州であるとすでに結論づけているから、今や涼州とすることに躊躇する必要はなかろう。
- (7) **shag shlg** 「ギクシャク」：石川 (2003a : 32, n.13) の指摘通り、高が **pheb shag** = **pheb pa'i shag po** 「いらっしやった朋友」とするのは考えすぎであろう。この箇所は石川 (*op.cit.*) の解釈通り **shag shlg** で一語とすべきであ

るが、「礼節の乱れること」とまで限定すべきだろうか。元来の意味である「揺れ動く」や「バラバラになる」を活かして「ギクシャクする」という訳を提案する。

- (8) **re lta des** 「その様々なことについて」: **re lta** は「様々」を意味する。Cf. 張 1993: 2716 **re lta** 項。次の **des** が指示代名詞 **de+** 具格助詞 **-s** であることは石川 (2003a: 32, n. 14) も指摘する通りだが、そのままではうまく訳せない。あるいは **-s** は **-r** (処格) の書き誤りであろうか。今は「～について」と訳しておき、後考を俟つ。
- (8) **dbyar mo thang** 「ヤルモタン」: 間違いなくチベット帝国期に設置されたトム(軍団、軍管区)の一つであるヤルモタン・トムである。ヤルモタンの位置については長い論争があったが謝・黄 (2007: 70-71)、黄 (2009) や謝 (2014) が相次いで明らかにしたとおり、河州の大夏川に同定すべきである。河州は隴右地域と拉脊山南辺〜チベット高原への道の要衝であり、ここにヤルモタン・トムが置かれたとしてもおかしくはない。
- (8) **'od bar** 「喼末」: Uray (1981: 82) がすでに漢語史料の「喼末」、コータン語史料の *hättäbara* に同定しており、特に付け加えることはない。
- (9) **gog chu rma grom** 「廓州の黄河トム」: **rma grom** がチベット帝国期に設置された黄河トムであることは間違いなく (Uray 1980: 313)。問題は **gog chu** で、石川 2003 は「河川の名称であろうが、その位置は明らかではない」としている。しかし王・陳 (1983: 50) や高 (1995: 333-34) は廓州と還元し、そして Uebach (1990: 410) は他の文書から **gog cu** = 廓州の可能性を指摘している。なお **gog chu** は他にも IOL Tib J 689 (= Ch.0021. Cf. Uebach 1990: 408) などに **gog cu** という地名として現れており、第二音節の **chu** は **cu** とも通じるわけであるから、やはり **cu** 「州」とみるべきであろう。すると、黄河の上流である **rma chu** に近い州でより近いものといえ、やはり廓州がその候補として最もふさわしい⁷。

なお廓州が黄河沿いの地帯における要衝の地であったことは佐藤

⁷ ただし問題は廓の中古音が *k'wāk* (Karlgren 1957: 774g) であることである。高田 (1988: 164) によると、廓と同じ宕摂の入声韻尾は一点の例外を除きチベット文字 **-ag** で写されている。そのうち一例だけ母音を *o* とする **-og** の例があるが (莫 'bog)、これを唇音韻母の影響であると説明している。しかし、もしこれが例外的なものではなく **-g** に変わる可能性もあったとするなら、廓 = **gog** も受け入れられるのではないか。なお本注に関して高田時雄京都大学名誉教授から様々な御教示を受けた。記して謝したい。当然ながら本注に残る誤りについては全て筆者が責任を有する。

(1978 : 108) がすでに指摘するところであり、逆に言えばこの地にこそ黄河トムが置かれるにふさわしい。地域名としてのマトム(黄河トム)はこの後も残るが、それについては石川の論考を参照されたい(石川 2003b)。

- (10) **zha du blta** 「拝謁するつもりである」：解釈が難しい語である。山口(1985 : 516) は「暗に暗に期するように」とし、石川(2003a) はシャを地名ととして (p.33, n.18) 「シャとして見られる」(p.26) と訳した。むしろ zha du は「御顔」(zha) 「のところにおいて」(du) と考えて zha ngar 「御顔の前にて (=御前にて)」と同義と解釈し、さらに blta を「見る (lta の未完了)」とみて、全体で「拝謁する」と解釈した方がよいのではないか。なお御顔を意味する zhal ~ zha については武内(1994) を参照されたい。
- (10) **jag rong** 「ジャクロン」：石川(2003 : 33, n.19) は甘州ウイグルの勢力圏内であることを前提に「張掖側の支流、弱水の溪谷 (rong)」であるとするが、このような前提は不要であろう。一方で高(1995 : 334) は天祝チベット族自治县にあるのではないかとし、また陸(2014 : 48) も当文書の jag rong を古鐘の銘文(後述)に現れる同地名と結びつけ、天祝の地名であるとする。

'dzam gling rgyas bshad (Wylie 1962) によると、天祝チベット自治県地域に jag rong thur chen dgon なる寺があり (Wylie 1962 : 110)、おそらくはこのジャクロンと同一視したのではないか。さらに同書には jag rong thur chen dgon の近くには stag lung dgon dga ldan dam chos gling という寺があり、ジャクロンの上流に位置するという説明がある (Wylie 1962 : 197)。stag lung dgon dga ldan dam chos gling は現在の達隆寺にあたり、「天祝县城東北、毛山南麓の松山」に位置するというから (蒲 1996 : 558)、その寺はジャクロンの位置はこの達隆寺よりも下流にあることになる。なお天祝チベット族自治县から発見された古鐘に古チベット文が刻まれており、そこにジャクロンが現れる。

チベットの聖神ツェンポ・チデツクツェンの兄の利益を願い、尚ラダギェルレブ兄弟のジャクロンのガンデンジンチェン寺院の処に大鐘を献上する功德によって、施主とすべての有情が無上で菩提心を得られますよう祈願します。この鐘は lcags kong... が文字を記して、僧 chos prin が鑄した。

bod kyi lha btsan po khri lde gtsug brtan mced kyi sku yon du bsngoste / zhang

lha sgra rgyal slebs spad kyi jag rong dga' ldan byin cen gtsug lag khang gl rkyen
du dril chen cig pul ba'I yon kyis yon bdag dang sems ca thaMs cad bla na
myed de byang cub kyI rgyub par smonto / dril 'di lcags kong [---] gis yi ge
briste dge slong chos prIn gyIs blugso

(Lha mchog Rgyal 2011 : 2)

この鐘にはツェンポのチツクデツェンの名が刻まれており、報告者の Lha mchog rgyal はそれを根拠にチツクデツェン統治期に鑄造されたと考える。納められたガンデンジンチェン寺院はジャクロンにあったというから、ジャクロンは帝国期にまで遡ることができる地名ということになる。さらに Lha mchog rgyal (2011 : 3) はこの jag rong dga' ldan byin cen とは *mdo smad chos 'byung* に現れる jag rong yar lung thur chen dgon dga' ldan chos sding や *sum pa'i chos 'byung* に現れる dga' ldan chos sding の前身であるとする。古鐘に現れる寺が直ちに dga' ldan chos lding の前身であるとするのは未だ早計である感もあるが、いずれにせよ前述の 'dzam gling rgyas bshad の記事と考え合わせると、件の寺の付近が jag rong と呼ばれていて、帝国時代、その近辺に寺があったということまでは認められるであろう。

なお陸 (2013 : 46-47) は、宋代漢文史料に現れる吐蕃の者龍族が jag rong と同一であるとする。その理由は両者の発音が近いからとしているが、者龍の中古音 (*tsja:liwong*, Karlgren 1957 : 45a, 1193a) からすると、jag と「者」が必ずしも対応していないようである。9・10世紀の河西音においても「者」は Tib. ca~ja で写されている (高田 1988 : 308-309, No. 63)。

- (11) **bod** 「チベット」: bod がチベットを指すことは間違いないが、問題はこのチベットと呼ばれる勢力の正体である。この場合のチベットとは何を指すのか、筆者には今一つはつきりとわかっているわけではないが、10世紀後半に涼州付近にて、また11世紀前半にツォンカ周辺にてチベット系政権が誕生したことを考慮すると⁸、涼州かあるいはツォンカ周辺のチベット人集団のことを指すのかもしれない。詳細については後考を俟つ。
- (13) **g.yar tshigs** 「俚諺?」: g.yar は「口、顔」の敬語形、tshigs は「節、韻文」などの意味である。文脈から判断するに、おそらくは諺の類を指すのであろう。

⁸ 例えば森本 2015 : 97を参照されたい。

- (14) **sho** 「サイコロ【占い】」: sho がサイコロであり、またサイコロ占いがチベット帝国内で広く行われるのみならず、実際の裁判過程でも利用されていたことが分かってきた。Cf. Dotson 2007, 西田 2008. ここでもサイコロ占いのことを指すのであろう。
- (15) **rim gro** 「厄払い」: 石川「除害」と訳す通り、いわゆる厄払いのことを指す。Cf. 張 1993: 2701-2. ただしここでは本当に厄払いを勧めているというわけではなく、おそらく前述のチベットの俚諺(?) にかけた冗談のようなものであろう。
- (16) **leng kong** 「令公」: 森安 (2000: 84) が指摘する通り、「令公」のチベット語音訳である。Cf. Uray 1981: 82. ただしこの令公が誰かについては議論がある。Cf. 森安 2000: 84、石川 2003a: 27-29.

3 P.t.1082中に現れる地名と帝国期との関係

上で引用して検討したのは P.t.1082 全体のうちの 3 分の 1 ほどであるが、本稿で特に問題としたいのは、ウイグル可汗によって報告された甘州以南、青海東部の状況である。語注にて明らかにした通り、ウイグル可汗の言及した地点はおおよそアムド地域に属する青海湖の東部、祁連山脈系の拉脊山が東西にのびる地域である。湟水が流れるその北辺には西寧、楽都などの諸都市が位置する一方、黄河上流であるマチュが流れる南辺には貴徳、尖札、化隆などが並ぶ。これらの地域のうち、P.t.1082にて特記される地域は

- ①拉脊山東部のジャクロン
- ②拉脊山東南辺のヤルモタン・トム
- ③拉脊山南辺の黄河トム

である。この3地点はいずれも帝国期に遡ることができる地名であり、それらが10世紀になっても相変わらず重要拠点であることが透けてみえる。

しかし不審なのは、この報告の中にツォンカについての情報が出てこないことである。ツォンカが帝国期において必要な地点であったことは間違いない。というのは、拉脊山南辺の黄河トム、ヤルモタン・トムだけでなく、西寧を含む拉脊山西部にトムが置かれたことはチベット語文書 P.t.1218に次のような文言が現れることから明らかなのである。

諸役人たちの大いなるトムの会議【が開かれた】ツォンカのツイーキャン

グから、辰年の孟春月に、ご命令の公印を押して【送付する】。

(1) \$ /:/ zhang lon chen po'i khrom chen po 'i 'dun sa // tsong ka rtsis skyang
dgur nas 'brug

(2) gi lo 'i dpyid sla ra ba 'i ngo la // bkye 'i phyag rgya phog ste //

(Pt.1218, ll. 1-2)

このトムの名称は残念ながらわからないが、しかし『新唐書』吐蕃伝によると、9世紀中頃のこの地域には鄯州節度使が置かれていて尚婢婢なるチベット人がその任に当たっていた⁹。Uray (1980: 312) がすでに指摘する通り、当時の漢人たちはチベットのトムの長官を節度使と呼んでいたのであるから、尚婢婢がトムの長であったことは間違いなかろう。

なお、尚婢婢はチベット帝国の崩壊時期にあたり、洛(落)門川討撃使の論恐熱¹⁰と同地域の覇権を争っていた。その事情についてはすでに佐藤(1986: 30-34)が詳細に論じているのでここで繰り返すことは避けるが、その顛末のみを簡単に振り返ると、次の通りである。

- | | |
|---------|--|
| 842年 | 論恐熱が宰相尚思羅を薄寒山(渭州付近)に破り、尚思羅は松州に逃げる。 |
| 843年9月 | 尚婢婢は大夏川に営し、河州の南で恐熱を攻撃。 |
| 844年 | 恐熱が鄯州を攻める。婢婢は兵を五道に分けて守り、恐熱は東谷山(河州南)で籠城し、薄寒山に退却。 |
| 849年12月 | 婢婢が河源で駐屯。恐熱を急襲するも敗退。 |
| 850年 | 恐熱が白土嶺(西寧市南)を攻め、鄯州西60里の犂牛峡で婢婢の將軍を破る。婢婢は甘州の西境に逃げる。 |
| 850年以降、 | 恐熱、渭州を保持しツェンポに冊立されることを願い、さらに唐に帰服して河渭節度使とすることを求めるも、唐が拒否 |

⁹ 『新唐書』卷216下(p.6105)、『資治通鑑』卷247会昌三年六月条(p.7986)。

¹⁰ なおこの人物が論(blon)か尚(zhang)かは明確ではない。『新唐書』吐蕃伝下および『資治通鑑考異』所引『補国史』(『資治通鑑』卷246, p.7970)には「姓は末('bal)」とあり、また唐蕃会盟碑のチベット語・漢語両語で記された盟誓参加者に 'bal blon klu bzang myes ma / 末論矩矩立蔵名摩(北面16行)とあるから、末=ベル氏('bal)とベル氏が論(blon)を冠することは確実である。また恐熱と尚婢婢との争いを詳しく記述する『資治通鑑』卷246会昌二年条(p.7970)には「論」恐熱とする。ところが当の『新唐書』吐蕃伝下は「尚」恐熱とする。Cf. 佐藤 1977 [1958-59]: 707-08, n. 59. また、『唐陸耽墓誌』にも「吐蕃東部尚恐熱」とあり(李 2014)、恐熱の出自に関しては更なる検討の余地があるようだ。なお陸耽墓誌の存在については村井恭子神戸大学准教授からご教示を得た。記して謝す。

すると、廓州に退却。

866年 論恐熱、唐により討たれる。

上のリストで注目したいのは尚婢婢と論恐熱の拠点である。おおよそ尚婢婢は西寧から拉脊山の北辺を拠点としていた一方で、論恐熱は隴西から出発して、拉脊山東辺から南辺の地域に進出し、そこを根拠地としていたようだ。そもそも尚婢婢は鄯州トムを本拠地としていたのであるが、一方で論恐熱は、河州付近を抑えつつ、最終的には廓州に退却したのであるから、まずはヤルモタン・トムを本拠地としつつ、最終的には黄河トムのある拉脊山に退いたということになる。言い換えれば、尚婢婢と論恐熱は拉脊山を挟んで北と南に陣地を持ち、対峙していたということになる（図1）。

では、10世紀前半にツォンカはどのようなになっていたのか。これについては不明というしかない。語注でも述べた通り、手紙に現れる「チベット」がツォンカに居するチベット人を中心とする集団であった可能性はあり、そうだとすると宋代の漢文史料に言及される湟水流域の吐蕃諸族がこれにあたるのかもし

図1 10世紀前半の青海東部



れない。いずれにせよ11世紀になると、ツォンカに青唐王国が誕生することになる。涼州付近にいたチベット勢力（西涼府）が崩壊し、青海における新勢力が台頭することになるが、唃廝囉は大中祥符二年（1009）ごろに、河州羌の何郎業賢に伴われて西チベットのマンユルから河州に至り、そこで文法を立てようとしたが、宗哥僧の李遵や宗哥族の首領として西涼府時代から名を知られていた温逋奇らがこれを略取し、いったんは廓州においたが、その後宗哥城に居を移し、李遵を論逋に任じた（岩崎 1977：1）。そうすると、唃廝囉の拠点は河州→廓州→ツォンカへと動いており、9世紀後半から10世紀前半にかけての拉脊山周辺における要衝を巡っていたことがわかる。

5 まとめ

本稿の考察結果は、次のようにまとめることができるであろう。

- P.t.1082の甘州ウイグル可汗の手紙は、10世紀前半の青海東部の状況を伝えるものである。その手紙によると、当該時期の勢力はチベット帝国時代に置かれた軍事拠点としてのトムが河州（ヤルモタン・トム）、廓州（マ・トム）を中心に展開していた。
- P.t.1082に現れる「チベット」が具体的に何を指すのかについてはさらなる検討が必要である。
- 軍事拠点としてのトムは、9世紀半ばのチベット帝国崩壊時期における論恐熱と尚婢婢との争いにおいても根拠地として、特に前者のそれは拉脊山の東北辺（河州～廓州）で、後者のそれは西南辺（鄯州）であった。

以上で本稿の検討を終わるが、扱いきれなかったことを以下に述べ、今後の展望としておきたい。

チベット帝国が崩壊した後も、青海地域とチベットや河西地域との連携は失われていなかったことは間違いない。というのも、チベット帝国支配下の河西地域ではチベット語が国際共通語や「ファッショナブルな第二言語」として使用され、またチベット仏教典籍が続々として導入されていたことからすると（武内 2002, Takeuchi 2004）、この時期にチベット高原と河西地域の狭間にある青海地域がチベット文化の影響を受けないでいたとは考えられないからである。事実、帝国期には拉脊山周辺には仏教施設ができ、それらのいくつかは古典チ

ベット語史料のみならず古チベット語文書にも在証される¹¹。チベット帝国崩壊後も各地の仏教教団は相互の連絡を失うどころか中央チベットとも繋がっていらしきことはいくつかの史料から判明するのであり¹²、そのチベット仏教界のネットワークの存在無しには唵廝羅の招聘と青唐国の成立はありえなかったはずである。そうすると、今後の課題としては、チベット語出土文書・伝世史料の両方から当該時代に関わる情報を検索することが挙げられよう。

参考文献

[一次史料]

Brag mgon pa Dkon mchog bstan pa rab rgyas. *Mdo smad chos 'byung*. 蘭州：甘肅民族出版社，1982年。

'Dzam gling rgyas bshad. in Wylie (1962).

Sum pa'i chos 'byung. *Chos 'byung dpag bsam ljon bzang*. 蘭州：甘肅民族出版社，1992年。

《資治通鑑》20冊，北京：中華書局，1956年。

《新唐書》16冊，北京：中華書局，1975年。

[中文]

高瑞 (1995). 《吐蕃文獻選讀》北京：中央民族大学出版社。

黄維忠 (2009). 德噶玉采會盟寺 (de ga g.yu tshal gtsigs kyi gtsug lag khang) 考一再論該寺非榆林窟. 《敦煌研究》2009- 3 : 93-99頁。

李宗俊 (2014). 唐陸耽墓誌考釋. 《中國邊疆史地研究》24 (3) : 125-133頁。

劉建麗 (2004). 《宋代西北吐蕃研究》蘭州：甘肅人民研究社。

¹¹ Uebach 1990 : 401-405にまとめられた当該時期のアムドにおける寺院リストを参照されたい。Uebach がすでに考証しているように、いくつかの寺院は古チベット語文書にも名前が挙げられている。また IOL Tib J 689にはチベット、ドカム、甘州、廓州における仏教の法統が記される (Uebach 1990 : 410-411)。

¹² 例えば10世紀半ばのある中国仏教僧が有していたと思われる「パスポート」(IOL Tib J 754) には、五台山から河州、そしてデンティク山 (今の旦斗寺)、ツォンカ、そして河西回廊 (涼州、甘州、沙州) へ抜けるルートが記される。Cf. van Schaik and Galambos 2011 : 特に161-162. また土肥 (1980 : 261) が指摘するように、四川から拉脊山南を経て河西方面へ通じる道が存在していたことにも注意したい。

- 陸離 (2013). 關於新發現的吐蕃赤德祖贊時期者龍噶丹興慶寺發願鐘的幾個問題. 《藏學學刊》10 : 44-55頁。
- 蒲文成 (主編) (1996). 《甘青藏傳佛教寺院》西寧：青海民族出版社。
- 齊德舜 (2011). 《唃廝囉家族世系史》北京：民族出版社。
- 王堯、陳踐 (1983). 《敦煌吐蕃文獻選》成都：四川民族出版社。
- 謝光典 (2014). 野摩塘 (dByar mo thang) 爲大夏川補證. 《西域歷史語言研究集刊》7 : 535-547頁。
- 謝繼勝、黃維忠 (2007). 榆林窟第25窟壁画藏文題記釋讀. 《文物》2007-4 : 70-78頁。
- 張怡蓀 (1993). 《藏漢大辭典》北京：民族出版社。
- 祝啓源 (趙秀英整理) (2010). 《青唐盛衰：唃廝囉政權研究》西寧：青海人民出版社。

[日文]

- 石川巖 (2003a). 帰義軍期チベット語外交文書 P.T.1082について. 『内陸アジア史研究』18 : 23-37頁. 図：巻頭2頁。
- (2003b). 吐蕃帝国のマトム (rMa grom) について. 『日本西藏学会々報』49 : 37-46頁。
- 岩崎力 (1974). 西涼府潘羅支政權始末考. 『東方学』47 : 25-41頁。
- (1975). 西涼府政權の滅亡と宗哥族の発展. 『鈴木俊先生古稀記念東洋史論叢』東京：山川出版社. 73-88頁。
- (1977). 宗哥城唃廝囉政權の性格と企画. 『中央大学アジア史研究』2 : 1-28頁。
- (1987). 宋代河西チベット族と仏教. 『東洋史研究』46 : 107-42頁。
- 榎一雄 (1994) [1940]. 王韶の熙河経略に就いて. 『榎一雄著作集7 中国史』東京：汲古書院. 293-358頁. 初出：『蒙古学報』1 : 87-168頁。
- 佐藤長 (1977) [1958-59]. 『古代チベット史研究』(上下) 京都：同朋舎。
- (1978). 『チベット歴史地理研究』東京：岩波書店。
- (1986). ダルマ王の在位年次について. 『中世チベット史研究』京都：同朋舎. 9-42頁。
- 鈴木隆一 (1982). 青唐をめぐる交通路. 『早稲田大学大学院文学研究科紀要 別冊』8 : 201-09頁。
- (1984). 青唐阿里骨政權の成立と契丹公主. 『史滴』4 : 35-50頁。

- (1985). 「ゲルセ」 —青唐吐蕃王国の王号—, 『安田学園研究紀要』 25: 24-29頁。
- (1986). 青唐吐蕃唃廝囉王家と青海諸部族の動向～とくに喬氏を中心として～, 『安田学園研究紀要』 26: 35-40頁。
- (1988). 青唐大酋青宜結鬼章と熙河, 『安田学園研究紀要』 28: 36-44頁。
- 武内紹人 (1986). 敦煌・トルキスタン出土チベット語手紙文書の研究序説, 山口瑞鳳 (編) 『チベットの仏教と社会』 東京: 春秋社, 563-601頁。
- (1994). 「鉛」と「お顔」 —チベット語敬語語彙形成過程をめぐって—, 『内陸アジア言語の研究』 9: 95-104頁。
- (2002). 帰義軍期から西夏時代のチベット語文書とチベット語使用, 『東方学』 104: 124-06頁 (逆頁)。
- 高田時雄 (1988). 『敦煌資料による中國語史の研究』 東京: 創文社。
- 土肥義和 (1980). 帰義軍時代, 榎一雄 (編) 『講座敦煌 2 敦煌の歴史』 東京: 大東出版社, 235-296頁。
- 西田愛 (2008). 古チベット語サイコロ占い文書の研究, 『日本西藏学会々報』 54: 63-77頁。
- 森本創 (2015). 南宋初期の茶馬貿易と吐蕃諸族, 『駿台史学』 154: 91-110頁。
- 森安孝夫 (2000). 河西帰義軍節度使の朱印とその編年, 『内陸アジア言語の研究』 15: 1-121頁。
- 山口瑞鳳 (1985). 吐蕃支配期以降の諸文書, 山口瑞鳳 (編) 『講座敦煌 6 敦煌胡語文獻』 東京: 大東出版社, 511-21頁。

[欧文・藏文]

- Dotson, Brandon. (2007). Divination and Law in the Tibetan Empire: the Role of Dice in the Legislation of Loans, Interest, Marital Law and Troop Conscription. In: Matthew K. Kapstein and Brandon Dotson (ed.), *Contributions to the Cultural History of Early Tibet*. Brill, Leiden: 3-77.
- Galambos, Imre and Sam van Schaik. (2015). The Valley of Dantig and the Myth of Exile and Return, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 78: 475-91.
- Horlemann, Bianca. (2004). *Aufstieg und Niedergang der Tsong-kha-Stammeskonföderation im 11./12. Jahrhundert: an der Schnittstelle von Tibet*,

- China und Zentralasien*. Peter Lang, Frankfurt.
- Imaeda, Yoshiro. (1980). Towards an Interpretation of the word *Chis*. In: M. Aris and Aung San Suu Kyi (eds.), *Tibetan Studies in Honour of Hugh Richardson: Proceedings of the International Seminar on Tibetan Studies, Oxford 1979*. Aris and Phillips, Warminster: 131–2.
- Imaeda, Yoshiro *et al.* (2007). *Tibetan Documents From Dunhuang, Kept at The Bibliotheque nationale de France and the British Library*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, Tokyo.
- Iwasaki, Tsutomu. (1986). A Study of Ho-hsi 河西 Tibetans during the Northern Sung Dynasty, *The Memoirs of the Toyo Bunko*, 44: 57–132.
- (1993). The Tibetan Tribes of Ho-hsi and Buddhism during the Northern Sung Period, *Asia Actatica*, 64: 17–37.
- Karlgren, Bernhard. (1957). *Grammata Serica Recensa*. Elanders Boktryckeri Aktiebolag.
- Lha mchog Rgyal. (2011). btsan po khri lde gtsug brtsan skabs kyi jag rong dga' ldan byin chen gtsug lag khang gi dril bu kha byang gi yi ger dpyad pa. 《中國藏學》 2011-1: 1–9.
- Richardson, H. E. (1998) [1969]. Tibetan *Chis* and *Tshis*. In: M. Aris (ed.), *High Peaks, Pure Earth*. Serindia Publications, London: 25–27. The first appearance at *Ajia Major*, xiv, 2. pp. 254–6.
- Soymié, Michel *et al.* (1991). *Catalogue des Manuscrits chinois de Touen-houang: fonds Pelliot chinois de la Bibliotheque nationale*, vol. 4. École française d'Extrême-Orient, Paris.
- Takeuchi, Tsuguhito. (2004). Sociolinguistic Implications of the Use of Tibetan in East Turkestan from the End of Tibetan Domination Through the Tangut Period (9th–12th c.). In: D. Durkin-Meisterernst, S.-Ch. Raschmann *et al.* (eds.), *Turfan Revisited: the First Century of Research into the Arts and Cultures of the Silk Road*. Reimer Verlag, Berlin: 341–348.
- Uebach, Helga. (1990). On Dharma-colleges and Their Teachers in the Ninth Century Tibetan Empire. In: Paulo Daffinà (ed.), *Indo-Sino-Tibetica: Studi in Onore di Luciano Petech*. Bardi Editore, Rome: 393–417.
- (1991). dByar-mo than and Goñ-bu ma-ru. In: Ernest Steinkellner (ed.), *Tibetan Historiographical Tradition on the Treaty of 821/823.* Tibetan

History and Language, Studies Dedicated to Uray Géza on His Seventieth Birthday. Arbeitskreis für tibetische und buddhistische Studien Universität Wien, Wien: 497–525.

Uray, Géza. (1980). *KHROM: Administrative Units of the Tibetan Empire in the 7th–9th Centuries*. In: M. Aris and Aung San Suu Kyi (eds.), *Tibetan Studies in Honour of Hugh Richardson: Proceedings of the International Seminar on Tibetan Studies, Oxford 1979*. Aris and Phillips, Warminster: 310–318.

——— (1981). L’emploi du tibétain dans les chancelleries de États du Kan-sou et Khotan postérieurs à la domination tibétaine, *Journal Asiatique*, 269: 81–90.

——— (1990). The Title *dbang po* in Early Tibetan Records. In: Paulo Daffinà (ed.), *Indo-Sino-Tibetica: Studi in Onore di Luciano Petech*. Bardi Editore, Rome: 419–433.

van Schaik, Sam, and Imre Galambos. (2011). *Manuscripts and Travellers: The Sino-Tibetan Documents of A Tenth-Century Buddhist Pilgrim*, De Gruyter, Berlin.

Wylie, Turrell Verl. (1962). *The Geography of Tibet According to the 'Dzam-gling-rgyas-bshad : Text and English Translation*. Istituto italiano per il Medio ed Estremo Oriente, Rome.

岩尾 一史 (いわお かずし)
龍谷大学文学部

岩尾一史・池田 巧 (編)
『チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開』
京都大学人文科学研究所 2018年3月刊
